

## 八大教育主張講演会の教育史的意義

橋本美保\*

学校教育学分野

(2014年9月30日受理)

### I はじめに

#### 1. 八大教育主張講演会とは

八大教育主張講演会は、「大正新教育運動」(「大正自由教育」)を象徴する歴史的な出来事として、日本教育史のテキストに必ず出てくる有名な大講演会である。8人の講演者の名前や講演題目はよく知られているが、従来、彼らの教育思想に関する研究は少なく、講演会そのものの実態についても明らかでない<sup>1)</sup>。八大教育主張講演会を主題にした論攷は、管見のかぎり、中野光「いわゆる「八大教育主張」について」<sup>2)</sup>だけである。中野は、この講演会の目的、講演者、参加者、講演会の形式等を簡潔に紹介し、この講演会が現職教員に教育学研究への関心を抱かせたことに意義があるとみて、「教員研究運動史」に位置づける可能性を示唆していた。しかし、その後は中野の著書が典拠とされ<sup>3)</sup>、大正期の教育が概説される際には、大正新教育運動の盛り上がりを示すものとしてこの講習会の開催が紹介されているが、その実態に基づく教育史的意義の検討は看過されてきた。

そこで本稿では、『教育学術界』をはじめとする主として主催者側の記録、また各種の教育雑誌記事や関係者の回想録などを用いて、八大教育主張講演会そのものに関する史実をできるだけ明らかにしたうえで、その教育史上への位置づけについて考察してみたい。

#### 2. 「革命的講習会」の概要

いわゆる八大教育主張講演会は、開催時の正式名称ではない。「八大教育主張」が発表された講演会として、後にそう呼ばれるようになったのである。この講

演会は、1921(大正10)年8月に大日本学術協会が主催した「教育学術研究大会」であり、8月1日から8月8日まで、毎日一日に一人ずつ論者が交替して8日間行われた。場所は東京小石川大塚窪町の東京高等師範学校講堂で、夕刻6時より始まり11時頃まで、連日2000人以上の聴衆を集めたといわれている。後述するように、実際には会場の都合で、別の場所で別の時間に開催された日もあった。講演者と論題は、登壇順に、及川平治の「動的教育論」、稲毛金七(詛風)の「創造教育論」、樋口長市の「自学教育論」、手塚岸衛の「自由教育論」、片上伸の「文芸教育論」、千葉命吉の「一切衝動皆満足論」、河野清丸の「自動教育論」、小原國芳(旧姓鯉坂)の「全人教育論」である。主催者によれば、この8人は「教育教授改造主張の八新人」<sup>4)</sup>と紹介されているが、どうしてこの8人が選ばれたのかは明らかにされていない。

この研究大会を主催した大日本学術協会が発行した雑誌、『教育学術界』以外の雑誌を調べると、不思議なことに、大会後にこの講演会のことを報じた記事がほとんどない。たしかに当時の大正新教育の代表的な担い手が全員登壇しているわけではなく、奈良女子高等師範学校附属小学校の木下竹次や東京女子高等師範学校附属小学校の北澤種一、帝国小学校の西山哲治や成蹊小学校の中村春二など有名な人物の名が見られない。そうは言っても8人のなかには、自由教育を唱道した手塚岸衛や分団式教育法の及川平治、独創主義教育論の千葉命吉、モンテッソーリ主義教育の河野清丸、全人教育論の小原國芳など、当時各教育雑誌に寄稿し、種々の講演会に引っ張りだこであった新進気鋭の論者が名を連ねており、新教育に関心がある者に

\* 東京学芸大学(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

とって非常に魅力的な講演会であったことは間違いない。にもかかわらず、『教育学術界』以外の雑誌では、個別の論者の主張を批評した記事は散見されるが、この講演会自体について評した記事はほとんど見当たらないのである。それは、この講演会が従来の「官製の講習会」に対抗して企画された「革命的講習会」であったことと無関係ではなかろう。つまり、当時の教育ジャーナリズムは、この「革命的講習会」に驚嘆しつつも、それに触れないようにしていたのではないだろうか。

## Ⅱ 八大教育主張講演会の企画

### 1. 尼子止の発案

大日本学術協会が発刊する雑誌『教育学術界』の主幹尼子止によれば、この催しの企画に着手したのは1921(大正10)年の3月ごろであったという<sup>5)</sup>。編集主任の真行寺朗人の記録では<sup>6)</sup>、同年4月の第2回編集会議の席上、7月号の特集内容について話し合うなかで、「斬新にして而かも奇抜、わが教育学界を通じて最も問題とするに足る底のものを作つて天下に見へやふという意気込で」議論が始まった。当初、尼子主幹は、真行寺が提案した「目下我が教育思潮界を喰りを立て、流れてゐる新思潮の色彩を天下に紹介」するという「新人号」を構想していたが、ただ原稿を集めて載せる特集ではなく、それを何かの「事業を為す題案」にできないかと考え始めた。そして、尼子は、夏期休暇中の8月に「教育学術研究大会」と銘打って、単なる講演会ではなく会員が講演者に質問や批判をし、討論できる「研究集会」の開催を発案した。

大日本学術協会の代表尼子止について一言しておく。尼子は1880(明治13)年大分県生まれ、号を鶴山、筆名を止水と称した<sup>7)</sup>。大分県師範学校を中退し検定試験を受けて郷里の小学校教員になり、小学校長を経験した後上京して、日比谷小学校で働きながら日本体育会体操学校で高島平三郎に学んだ。1905年に同校を卒業、下関の商業学校で約3年教鞭を執った後、再び上京した。神田の小川小学校で訓導をしながら、明治の末葉から『教育学術界』の編集に関わった。大正の初めに同誌の編集主任となり、次いで主幹となって1916年に大日本学術協会を興した。その後、出版社モナスを設立して教育関係書の出版企業を中心に、教育ジャーナリスト、教育評論家としても活躍した。その論説は、体育や遊戯の教授実践から教育制度や教育政策、政治・外交問題など多方面に及び、辛辣な筆致が特徴的である。帝国教育会、教育評論家協

会、日本体育会に広い人脈を持ち、「よく豪毅の氣象と論議風発と拘容性をもつて活動」<sup>8)</sup>したが、1935(昭和10)年3月に事故のため負傷、1937年4月に59歳で死去した。

### 2. 講演者の選定と日程調整

教育企業家としての尼子の名を高めたのは、いうまでもなく「八大教育主張講演会」である<sup>9)</sup>。尼子主幹の発案を受けて、真行寺を中心とする大日本学術協会幹部は、きわめて短期間で未曾有の大研究大会の開催を実現した。準備は、まず講演者の日程調整から始まった。8人の講演者は尼子が選定したという<sup>10)</sup>。当時、「所謂教育界の新人」で「人気者」の論者たちは、夏期休暇中に各地で開催される講習会の講師として招聘されており、頗る多忙であった。尼子の招聘に対して、千葉と稲毛は即座に賛意を示して応じたが、その他の論者との交渉は難航した<sup>11)</sup>。なかには十数回の面会と電報の応酬でようやく約束をとりつけた場合もあったという<sup>12)</sup>。『教育週報』が報じたところによれば、「折衝に最も苦心させられた」のは、片上と小原であり、「片山氏は八人で討論でもさせるかの様に誤解し、小原氏は多忙々々で中々承知しなかった」という<sup>13)</sup>。

尼子がこの8人にこだわったのは、「八人の中たつた一人欠けても、この講習の意義をなさない」ほどに、自分が「会つて直接に聞いて見たい」主義主張であったからだった<sup>14)</sup>。尼子がこの研究大会を企画した意図は、彼が閉会の挨拶で述べたように、「吾教育界に対する学術的向上の一方法」とするためであった。それは彼にとって、欧米の教育学説を日本の立場で研究し「日本人の日本人たる価値を存する」ものとするのであり、すでに「世界に発表しても恥かしくないほどのものも出来て居る」という認識に基づいていた<sup>15)</sup>。尼子は、欧米の教育思潮の紹介が主流であった当時の教育学研究のあり方に対して、批判的な立場からこの大会を企画していた。したがって、講演者には、大学の教授の地位にあたり、多数の著書によってすでに高名になっていた「教育学者」ではなく、教育界に改造的気運を呈しつつあった新人が選ばれた。尼子の認識には、いわゆる教育の「理論家」に対して、当時の呼び方でいう「実際家」「実際研究者」という構図があった。その意味で、当時「教育実業界」で注目され、大きな影響を与えていた8人の論者は、尼子自身にとって興味深い人材であったとみられる。後年、志垣寛は、八大教育主張について「この顔ぶれとこの題目とは殆んど当時流行のすべてを網羅しつく

したもの」であり、論者はいずれも「素人教育学者であつた」と回想している<sup>16)</sup>。「実際界」の人々には、8人の人選は妥当なものであつたと受け取られていた。

尼子はじめ編集者たちは手分けして粘り強く候補者と交渉し、再三の日程変更に関口しながらも、5月中旬までには8人の内諾をとりつけたとみられる。真行寺はこの時の苦勞を、「主演者諸君の日時変更申込の事件については、其の都度々々主幹を初め僕等に至るまで実に心痛したのである。憂慮したのである（以下、くの字点は同の字点または仮名に改めた）」<sup>17)</sup>と記している。

講演者と日程が決定した後は、会場が問題となった。東京高等師範学校の教授等の口添えを得て、その講堂を借用することに決し、早速大会役員と準備係を組織した。この研究大会では、「凡ての方面に於て異常なるレコードを作ること」が目標とされており、会場係には30名以上、見学係には15名を配置して、周到な用意が進められた<sup>18)</sup>。

### 3. 会員の募集と準備作業

5月1日発行の『教育学術界』誌上には、「教育学術研究大会開催」の予告記事が掲載された。それによると、「従来の講習会は、喋言放し、聴流しで、何れも真の研究目的を達することが出来なかつた。之を改造せんがために、本会は今夏八月上旬を期し、約十日間の予定を以て、東京に於て、第一回教育学術研究大会を開催（合字は仮名に改めた）」することが報じられ、8人の講演者の氏名と仮の演題が示されている<sup>19)</sup>。翌月、6月1日に発行された同誌には、研究大会開催の決定と会員募集開始の広告が掲載されると同時に、募集の詳細が記された折り込み広告が挿まれた。その折り込み広告には、「講義教育学術研究大会」の概要が記されており、講演については演題と論者が以下のように紹介されている<sup>20)</sup>。

講演（自己の主張に就き論述）（講演の順）

- 一 動的教育の要点……兵庫県明石女子師範学校  
主事 及川平治君
- 二 真実の創造教育……創造社経営『創造』  
主筆 稲毛詛風君
- 三 自学教育の根底……東京高等師範学校  
教授 樋口長市君
- 四 自由教育の真髓……千葉県師範学校  
主事 手塚岸衛君
- 五 芸術教育の提唱……早稲田大学

教授 片上 伸君

六 衝動満足と創造教育……広島県師範学校

主事 千葉命吉君

七 自動主義の教育……女子大学校

主事 河野清丸君

八 文化教育の主張……成城小学校

主事 鯉坂國芳君

入会希望者への注意書きによれば、会費は一人3円で、申し込み順に前列から座席指定、地方からの参加者には宿泊所を斡旋し、5割引の汽車割引券送付の特典があつた。また、会期中の午前中には、「見学隊」を組織して、「明治神宮、宮城、新宿御苑、芝浜離宮、後樂園、文部省、帝国大学、博物館、動物園、印刷局、電話局、戸山学校、新聞社」などを参観する予定であること、毎夜講演と討論の後、約30分間「教育講談、お伽琵琶」などの余興を演ずることが予告されている<sup>21)</sup>。

同日、東京で発行されている主要教育雑誌には、この研究大会の広告が掲載された。広告の内容は雑誌によって異なっており、記事の余白に囲みで付せられた数行程度の簡単なものから先の折り込み広告が挿まれたものまで様々であつた。広告を掲載した教育雑誌（発行者）は、この研究大会の「後援」に位置づけられている<sup>22)</sup>。

広告が掲載された翌日から、大日本学術協会には入会の申し込みが1日に50～60通、多いときには連日100通以上が寄せられた。6月20日には入会申し込みが予定の定員1200名を超えたが、全国から寄せられる参加希望に應えるためにさらに「番外会員」を受け入れ、階上の500席を定席とせずに解放することとした。しかし、500席もすぐに満席となり、7月1日発行の『教育学術界』誌上には、「急告」として「満員入会謝絶」が告知された<sup>23)</sup>。さらに、7月20日を過ぎても入会申し込みは後を絶たず、結局、「三千有余百通」の申し込みに対して、1000通以上を謝絶しなければならず、事務局は連日謝絶の封書書きに追われたという<sup>24)</sup>。

7月22日に大日本学術協会編集部で幹部の総会が開かれ、「凡ての方面について聊かの遺漏なからんことを期し」て、当日までの準備スケジュールが検討された。それからの準備は、猛暑の中多忙を極めた。この頃の準備の状況を、真行寺は「幹部は毎日々々汗みどろに大車輪に活動してゐる間に、愈々時日は接迫して目睫の間に肉薄し、炎熱は愈々高上して汗は滝の流るゝが如く、… [中略] …実際流汗淋漓だつた。仕事

をしては風呂に飛び込み、果ては氷を嚙んで炎熱と戦ったと回顧している<sup>25)</sup>。さらに直前になって、7月28日から31日の午後5時までは会場の東京高師の講堂が他の催しで使用中であることがわかり、教育学術研究大会の一切の準備は7月31日の午後5時半頃から徹夜で行わなければならなかった。7月31日の夜、幹部全員と東京高師の使丁等総員60人余りが、机や椅子の運搬、番号札や注意書きの貼付、湯呑所の設営などの会場作りに携わった<sup>26)</sup>。

### Ⅲ 大会の運営とその実態

#### 1. 開会当日の盛況と司会者

研究大会初日である8月1日、大日本学術協会にある本部には、早朝から入会申し込みの電話や来客が殺到した。会場の東京高等師範学校の講堂前は立錐の余地がないほど「雲霞のごとく」人であふれ、高等師範学校前の電車停留所から延々と長蛇の列を作っていたという。開会前の入場者はすでに2000人を超え、会場はまさに寿司詰め状態であった<sup>27)</sup>。6時の点鐘と同時に尼子主幹が登壇して開会の辞を述べ、灼熱の暑さのなか、8日間の研究大会は幕を開けた<sup>28)</sup>。

尼子主幹による開会の辞に続いて、司会者側から大瀬甚太郎と吉田熊次が挨拶をした。実は、この研究大会が多くの聴衆を集め、盛況を呈した理由は、8人の講演者が魅力的であっただけでなく、司会者に8人の著名人(学者や教育関係者)を揃えたことにもよる。その顔ぶれは、東京高等師範学校教授で文学博士の大瀬甚太郎、東京帝国大学教授で文学博士の吉田熊次、同じく東京帝国大学教授で文学博士の春山作樹、慶応義塾大学教授の小林澄兄、東京帝国大学助教授の入沢宗寿、同じく東京帝国大学助教授の阿部重孝、東京府視学の松原一彦、そして『教育学術界』主幹の尼子止の8名である。尼子は、司会者に次のような役割を期待していた<sup>29)</sup>。

質問の時間は座長となつて、采配をふつてもらふんだね。講師は無論居残つて、質問に対してはそれぞれ応答する、議論の喧ましい時には座長がその始末をつけるといふ風にね

8名の司会者は、研究大会に毎日出席したわけではなく、それぞれが出席できる時に参加した。1日に一人ないしは二人が出席したようである。8名の司会者は講演者以上に多忙であった。社会的地位も知名度も高かった彼らは、各種講習会や講演会を掛け持ちして

おり、その合間に参加した。

先述のように、『教育学術界』をはじめ、主要な教育雑誌にはこの研究大会の広告が掲載されたが、なかには司会者の顔ぶれを紹介したものもあり、盛会への期待を掻き立てていた<sup>30)</sup>。

#### 2. 大会の日程(スケジュール)と参加者

連日夕方6時から始まる研究大会では、まずその日の登壇者が講演し、その後質疑とそれに対する答弁が行われた<sup>31)</sup>。ただし、5日目は講演者の片上伸と会場の都合で、午前8時から慶応義塾大学の講堂で行われた。また、8日目は小原國芳の都合で午前中に開催された。司会は、先述の8名のうちの誰か一人が毎日務めたようである。講演は、どの論者もおおよそ2時間から2時間半ほどであったが、片上による3時間以上の長講もあった。質問者は大体6～8名であり、少ない時は7日目河野清丸に対しての3名、多い時は6日目千葉命吉に対しての15名であった。討論は、1時間から1時間半程度行われ、その後は、毎日違う余興が用意されていた。初日は、「支那人李彩」の奇術、二日目は「錦心流琵琶」で「本能寺」が演じられた。その他に神楽や楽器の演奏、活動写真や講演など、会員が愉しめるように工夫されており、連日11時頃に閉会した。また、主催者は広告通り、会期中の日中に希望者を3組に分けて市内見学の引率をした。学校、官庁街、工場、新聞社、公園などを毎日案内するという至れり尽くせりの対応であった。

最終日は小原の講演と討論が午前中にあり、その後閉会式が行われた。閉会後には約50人の会員が「会員談話会」に集った。大日本学術協会の幹部に加え「各地の代表的」な有志たちは、「昼食兼帯の餡パン」を食しながら「大気煙」を吐き比べたという<sup>32)</sup>。この席上で、「教育研究同志会」の設立が決議され、松原一彦、田淵巖、真行寺朗人の3名が設立委員に選ばれた。

後日、設立委員は『教育学術界』誌上に「教育研究同志会の設立に就て」と題した記事を掲げ、設立の経過と会則案を示して入会を呼びかけた<sup>33)</sup>。それによると、同会の目的は教育学術の研究であり、年会費6円50銭を納めた会員には、機関誌『教育学術界』が配布されるほか、同会主催の研究会や講演会など各種催しにおける会費等の優待や、教育研究や就職を目的として上京する者に便宜をはかるなどの特典が与えられることになっている。同会のその後の動向については不明である。

なお、主催者が発表した「教育学術研究大会々員」

2060名の府県別一覧<sup>34)</sup>を見ると、会員数が多い上位5県は、「神奈川県158人、三重県91人、兵庫県91人、福岡県85人、北海道庁80人」であり、少ない県は「徳島県7人、石川県6人、樺太庁4人、沖縄県1人、浦塩斯徳1人」となっている。東京府の会員数は65人で、意外に少なく、いわゆる「内地」のすべての府県から広く会員を得ている<sup>35)</sup>。注目されるのは「朝鮮31人、台湾20人、支那12人、樺太庁4人、浦塩斯徳1人」と植民地、海外からの参加者が少なからず見られたことであり、各地における新教育への関心の高まりが看取される。

### 3. 大会の評価と盛会の背景

この研究大会を評して、吉田熊次は「実に古来未曾有の「革新的講習会」であつた。而して其の間に講述せられたる八種の新教育主義は実に現時に於ける教育思潮を代表するものであつて、此等の新論を一堂に集め得たるは斯界[の]幸福である」<sup>36)</sup>と讃えている。他の司会者たちも、同様に、8人の論者が唱道した教育論の内容の新奇さや共通の傾向を認めると同時に、それを集めて講演させ、「質疑と答弁」という討論の形式を採り入れたことに、その意義を認めている。8人の主張の共通性とその思想的意義については別稿で論ずることとし、ここでは研究大会そのものに対する評価について考察しておこう。

はじめに触れたように、『教育学術界』以外のほとんどの雑誌は、この大会の論評をせず、無視するという対応をとったが、それは、この研究大会が既存の講習会を痛烈に批判し、それを改革する目的で開催されたものであり、当時の常識をはるかに越えた風変わりな催しであったことによる。この大会自体を直接批判した記事はほとんどみられないが、広島高等師範学校教育研究会の機関誌『学校教育』には、この大会で尼子が巨利を得たことを示唆する風刺漫画(図1)が載せられている<sup>37)</sup>。また、『教育思想学説人物史』を著した教育評論家藤原喜代蔵は、「出版企業家の尼子止」によって、八大教育主張は「大正教育界に於ける最高權威の指導原理の如く妄想せらるゝに至つた」<sup>38)</sup>と記しており、当時尼子は教育ジャーナリズムの世界では必ずしも評判が良くなかった。

一方、研究大会後、司会者として参加した教育学者たちは、一様にこの大会の斬新さを語っている。それは、大瀬甚太郎の言によれば、「現今本邦の教育界に於て言論上及び實際上一種の新思想、見識を以て立つて居る人士を網羅して講師としたことに於て、又質疑応答の時間を設けた点に於て、普通の講習会と異なつて

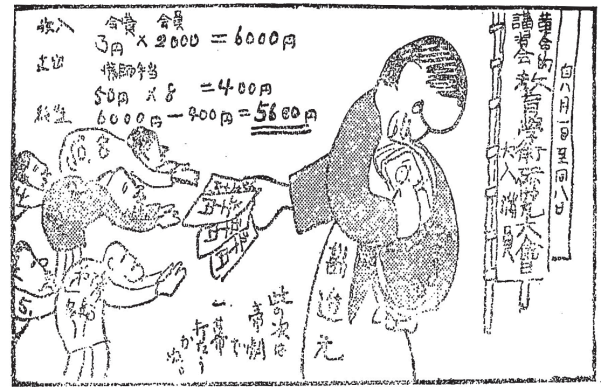


図1 八大教育主張講演会風刺漫画

居たから」<sup>39)</sup>であり、阿部重孝も「所謂夏期講習会といふものの従来の形式を破つた新しい試みであつて、その意味で、教育界に貢献した所も決して少くはなからふ」<sup>40)</sup>と評している。また、聴講者の多さと彼らの真剣さ、会場の熱気に触れ、入沢宗寿は、「如何に同会が教育界の必要を感ずる所に合致したかを感得した」<sup>41)</sup>と感想を記し、春山作樹も、「尼子止氏の計画的天才に敬服した」<sup>42)</sup>と述べている。

さて、この大会の盛況は、小林澄兄が、「従来の天降りの、無生気の講習会に飽き果ててゐた一般の風潮にも基因した」<sup>43)</sup>と指摘しているように、従来の講習会に対する反動であつたと捉えられる。一般の参加者の感想の中には、以下のような従来の講習会についての不満が散見される。

お勤めに出席して名簿の捺印を終れば講習証書は戴ける… [中略] …講習が午後迄も延長せられたら殖えるのは空席のみ、偶に出席する者も堪へ難くて公然の居眠三昧。斯くて講師も幹部も不快不満の裡に会を閉ぢるといふのが過去にあつた多くの夏期講習会である<sup>44)</sup> (熊本県 笹原英三郎)

従来講習は眠い目をこすりこすり聴くばかり、得る所は僅少で費用のみは多大であつた。中には無責任極まる講習会主催者や講師さへあつた<sup>45)</sup> (群馬県 高坂仲重郎)

郡長や視学の監視の下に自分の希望もしない講習に出席を強ひられ、無趣味の講習に飽き果てた教育者は東西南北より参加して此の新しい大傘下に、馳せ参じた<sup>46)</sup> (東京市 松井藤市)

在来の制度形式による講習会なるものが、斯かる講習員に対して満足を与へ得たかと云ふに、これ又そ

の動機が純であるだけその態度が真摯であるだけ、それだけそれらの人々に失望と不満とを与ふるに過ぎぬ底のものであつた<sup>47)</sup> (東京市 田淵巖)

このような感想の背景には、従来「講習会」と呼ばれていた教員研修の普及と形骸化の実態があつたとみられる。次節では、この大会の盛況という事実が示唆する当時の教員研修の問題点について考察していこう。

#### IV 講習会の普及と問題点

##### 1. 夏期講習会の普及と官製化

現職教員研修の主流である夏期講習会は、1890 (明治23) 年頃に始まり1900年代に盛行した<sup>48)</sup>。夏期講習会は、慢性的な教員不足の状況で、学校の授業時間を欠くことなく教員に研修機会を与え、その資質技能を向上させるための現実的な方法として採用され普及した。1919 (大正8) 年度の文部省の調査によれば、その年に開催された夏期講習会数は1248 (公設370, 私設878), 参加教員数は約15万3245人 (公設4万3317人, 私設10万9928人) であつた<sup>49)</sup>。同年の小学校教員の総数は17万8450人, 中学校教員は7219人であつたから<sup>50)</sup>, 教員の大部分は夏期講習会に参加していたとみられる。冬期講習会やその他の講習を含めれば、当時の教員は毎年いずれかの講習会には参加していたであろう。講習会には、文部省主催の講習会のほか、県単位、郡単位で自治体や教育会が主催するものや、各種教育関係協会、大学、師範学校などが開催するものがあつた。大正期に入るといずれも文部省や県の政策を徹底させる趣旨で行われるものが増え、教員は参加することが当然であるかのように、半強制的に参加を求められていたという<sup>51)</sup>。

夏期講習が定着する1900年ごろになると、営利的な私設講習会增加し、文部省による取り締まりが強化されていった<sup>52)</sup>。文部省は視学官の指導を徹底したり、受講者の学力差への配慮や講師選定についての講習基準に関する通牒を繰り返し発している。1907年には、府県庁に対して講習の期間や講習員の定員の基準が示されたほか、翌年の通牒では、講習に対する試験の実施や、その成績を郡市長へ通知すること、成績を無試験検定などの際に活用すること、などが求められた。このように夏期講習会の定着過程においては、現職教員の資質技能を向上させるための講習会整備の基本的要件が明確にされ、その水準維持に一定の役割を果たした。一方で、文部省の管理と指導の強化は、講習会の「官製化」を押し進めることにもなつた。

当時の講習会の弊風を、大会執行部の真行寺は風刺をまじえて次のように語っている<sup>53)</sup>。

県郡あたりで講習会をやると所謂其の筋の役人様のご機嫌迎合、其の癖自宅を出発するときには有らゆる愚痴を零しながらも、首——パン等の問題を考へてお勤めに出席して名簿の捺印を終れば便所へ行くなんて宜い加減に何時か失敬してしまふ。それが五日か若しくは一週間か過ぎれば講習証書は貰へる。履歴書へも書ける [ , ] 首も安全だ。… [中略] …そして幹部も講師も講習員も亦共に不快不満の裡に会を閉ぢるといふのが在来の講習であつた

教育学術研究大会は、こうした講習会に対抗するため、当時全国的に人気のあつた夏期講習会の会期に重ねて開催されていた。この年、民間の講習会で最も権威があつた帝国教育会は8月1日から8月18日まで、茗溪会は8月1日から8月6日まで、東京女子高等師範学校の児童教育研究会は8月1日から8月6日まで夏期講習会を開催している<sup>54)</sup>。また、この年の文部省主催小学校教員講習会は、8月1日から7日まで東京高等師範学校において「歴史地理」が、7月25日から8月4日まで広島高等師範学校において「修身教育」が開催されている<sup>55)</sup>。地方の教育会が主催する講習会も同時期に開催されたものが多く、こうした夏期講習会のラッシュ期に全国から2000人以上の会員を集め、盛會を得たことは、上意下達式が常態化した講習会のあり方に一石を投じることとなつたであろう。

##### 2. 教育会の形骸化への批判

先に見た夏期講習会の官製化の要因を、文部省による政策的な取り締まりだけに帰することはできない。1900年代前半から、地方の教育行政当局における講習と教育会の講習とは一体のものとして行われるようになっていた<sup>56)</sup>。講習を主催した地方教育会は、元来行政当局の保護と指導の下で成立発展してきたものであつたが、大正期に入ると行政と癒着した教育会の体質が、各地で批判されるようになった。

1920 (大正9) 年、西山哲治は「悪講習会の如きは教育界に於ける好ましからざる流行病」であるとして、講習会員の消極的、受動的姿勢が、「教員の監督者になる郡長、郡視学、校長に対するお役目を果す所以、郡、市内教育界に於ける世間並の義務的交際たる所以」であり、「当路者が余り義務講習といふやうに強制がましくする」ことによる弊害であると非難し

た<sup>57)</sup>。さらに西山が指摘した具体的な問題点のなかで注目されるのが、講師としていわゆる名士大家を招聘して小学校教育の実際に通じていない空理空論を聴かせること、そして大家招聘のために重い費用負担をしていることであった。これらは講習員としての教師たちに苦役負担を強いるものであり、講習主催者としての教育会に改善が求められた。

同年、6月発行の『帝国教育』には同誌の編集に携わっている三浦藤作が「教育会改造私見」を発表している<sup>58)</sup>。三浦は、「会員に団体の一員たる自覚」を持たせられない従来の教育会は「有名無実」であり、存在意義が疑わしいと酷評している。その理由の第一は、府県あるいは郡市の教育会が、講習会への出席や雑誌購入を強制していることにある。両者は教育会以外の団体によっても担える事業であり、特に教育会雑誌は、「教育に門外漢の県知事や教育課長の素人論を巻頭に師範学校訓導の研究が一二篇出て居る位のもので、これがために毎月会費を徴収せられる者は災難である」と断じている。第二に、行政と癒着している教育会には、「教育社会の輿論代表又は教育者の保護」という目的は果たせないという。三浦は、会長や理事に行政や議会の長、視学や中学校長を推戴している「今日の如き教育会」は、「寧ろ輿論を抑圧するに最も都合のよい組織」になっていると非難している。

こうした批判的な意見の高まりを背景に、大日本学術協会の教育学術研究大会は企画されていたのであった。会員募集の詳細に関する広告が折り込まれた1921年6月1日発行の『教育学術界』の巻頭には、「現在の教育会を打破革新せよ」<sup>59)</sup>という論説が掲げられ、中央、地方を問わず教育会のあり方が厳しく批判されている。大日本学術協会の同人である著者佐藤浩悠は、教員は強制的に教育会に入会させられ、会費を「強制的寄付金」として払わされているが、教育会の事業は「一として価値あるもの存せざるなり」と断じている。たとえば、雑誌発行については、貧弱な議論しか行われておらず、幹部である官僚たちの「一種の売名」にすぎないこと、職務上の研修である講習会や研究会に会費を徴収することは「矛盾の甚だしきもの」だと指摘している。また、教育功労者として公職者の功労を私立の会で表彰するため、「自分等の懐中から出金」することも「全く意義無きこと」だと述べている。そして、教育者は「各自の自発的意思」によって団結すべきであり、教育会は「教育者のみ」で組織され「自治独立」を旨とすべきこと、「時には当局の教育上の非議をも談」ずる必要があると説かれている。そのため、府県教育会も郡教育会も全て「解

散」し、全国の教育者が団結して新たに全国的な統一機関を組織することが提案されており、次のような文章で締めくくられている<sup>60)</sup>。

天下百万の教育者よ立て、立つて団結せよ。真剣に団結せよ。而して教育の使命に向かつて猛進せられよ。

折しも、1921年3月に教育ジャーナリストたちによって「教育擁護同盟」が結成され、義務教育費削減政策への反対運動が活発化している時であった。ジャーナリズムによる教員運動の気運の喚起を背景として、いわゆる八大教育主張講演会は開催されていたのである。こうした状況のなかで、当時の教師たちがどのくらい組織的政治的な活動、すなわち教員運動に関わるべきだと考えていたのかはわからない。ただ、教師たちは、多くの教育会がもはや自分たちの身分や生活を守ってくれる組織ではないことを、彼らを啓発し教師としての成長を促してくれる組織からは遠い存在であることを実感していたのではないだろうか。

## V おわりに

大日本学術協会の幹部の一人が、企画当初、参加者は「5百名も集まればいゝ方だろう」と予想した教育学術研究大会は、それを上回る未曾有の盛況をみた。閉会式の挨拶で、尼子は以下のように主催者としての満足感を示している<sup>61)</sup>。

今夏東京市中に於ても沢山の講習会が開かれて居りますけれども、其の講習会員の半分は本会に集つて居るといふことが噂に上つて居るらしい。高等師範学校内に於ける大日本学術協会の大講習会といふ別名が附せられて居るのは一人私の喜びとする所ではありません。出席者たる諸君の熱烈なる研究心の表現であつて実に二千有百諸君の名誉とすべきことである…。[中略]…今回の盛況は、吾が今日の教育界の何者かを語るものである。

講習の盛会に対する喜びの言葉は、一般参加者から寄せられた感想にも溢れている。熊本県の笹原英三郎は、「其の生气あり活気充ちて如何に意義があつたかは此所に述ぶる余裕がないが、唯痛快で徹底的であつた事だけを記したい。…[中略]…特異の色彩を帯びし教育学術研究大会なる、所謂革命的講習会に出席するを得て、今に痛快に堪へぬ次第である。そして今に

あの大会の状況を夢みては快哉を叫ばざるを得ぬのである」<sup>62)</sup>と記している。感想の多くには、この大会が歓呼の声に応えるものであったことに対する主催者への感謝が綴られている。

研究大会の後も、8人の講演者の教育論に対する個別の批判は多くの雑誌に掲載され、盛んに議論された。講演者によって批判記事の多少精粗があり、批判の記事を寄稿した者は帝国大学の教授から地方の一介の訓導まで様々であった。それは、論者8人が「左程有名でもなし、肩書きも亦貧弱」<sup>63)</sup>な講師であり、その主張が「平民的の講演」<sup>64)</sup>であったため、現職の教員たちも率直な意見を発しやすかったからだと思われる。現職教員を広く教育論議に主体的に参加させたという点から見て、教員の批判的な思考や態度形成に果たしたこの研究大会の役割は注目されるべきであろう。

従来、大正新教育運動は運動史として注目され、評価されてきた。いわゆる八大教育主張講演会もその視点から、運動の高揚を象徴する歴史的事象として位置づけられてきたといえる。たしかに、それは当時の社会状況を踏まえた妥当な解釈である。しかし、より教育的な視点からそれを捉えようとするならば、何よりも当時の教師とその教育実践にとって八大教育主張講演会とは何だったのかが問い直されねばならないだろう。筆者は、八大教育主張講演会が示唆していることは、教師が自らの立場と責任に向き合い、「実践」のなかから教職の本質を見出そうとしていた姿、すなわち「教職の覚醒」にあり、自らの使命感から進んで自己研修して成長することの「喜び」を自覚したことでないかと考えている。こうした現職研修（教師教育）の視点から、さらにこの大会の意義を追求するためには、そこで議論された八大教育主張の思想史的な意義や、それが教師の実践思想の形成や実践改革に及ぼした影響について検討を進める必要がある。それらについては次なる課題としたい。

### 〈註〉

- 1) 八大教育主張講演会を「まさに大正自由主義教育のピークともいべき一大イベント」と紹介した堀松武一も、この講演会に関する教育史研究がないことを指摘している(堀松武一『大正自由教育と千葉命吉』私家版, 2012年, 17頁)。
- 2) 中野光「いわゆる「八大教育主張」について」梅根悟編『教育学説史研究』(昭和52～54年度科学研究費補助金費研究成果報告書)第2号, 1978年, 1～7頁。

- 3) 典拠とされているのは、多くの場合、中野光『大正デモクラシーと教育』(新評論, 1977年, 123～126頁)の記述である。
- 4) 尼子止「巻頭之辞」『教育学術界』第44巻第1号, 大日本学術協会, 1921年, 1頁。
- 5) 風塵子「教育学術研究大会奇録」同上書所収, 217頁。著者は、尼子から記録係を任された佐藤浩悠とみられる。
- 6) 真朗子「教育学術研究大会前後記」同上書所収, 201～202頁。真行寺の本名は吉太郎といい、号を「朗生」と称したという(恩田裕「真行寺朗生の体育思想」『教養論集』第8号, 成城大学法学部, 1990年, 67～69頁)。『教育学術界』では、筆名「朗人」を名乗っていたようである。
- 7) 尼子の経歴については以下の記事に拠った。教育週報社「全国教育家名簿」(尼子止の項)『教育週報』第44号, 教育週報社, 1926年, 6頁。尼子止「恋愛, 座禅, 自殺——高島平三郎先生の教訓」『教育週報』第186号, 1928年, 5頁。尼子止ほか「創刊当時の思ひ出を語る会」『教育学術界』第70巻第5号, 1935年, 53～56頁。
- 8) 岡田怡川「尼子主幹の逝去を悼む」『教育学術界』第75巻第2号, 1937年, 1頁。
- 9) 研究大会の速記録を元に出版された『八大教育主張』(1922年)は、12版を重ねて1万2千部を、『八大教育批判』(1923年)は7～8千部を売り上げたという。両書は、新教育運動の全国的な普及と展開に重要な役割を果たしたといえよう。なお、出版社モナスは、『八大教育主張』の売り上げ純利益1万円を資本にして設立された(尼子止「八大教育主張の講習会」『教育の世紀』第6巻第1号, 教育の世紀社, 1928年, 101頁)。
- 10) 同上書, 99頁。
- 11) 同上。後述のように、この大会は既存の夏期講習会の会期に重ねて開催された。すでにこの年の夏期講習会の講師や責任者となることが決定していた人物については、当初から尼子は8人に選定できなかった可能性がある。木下竹次, 北澤種一, 藤井利誉らはこの大会の「参与」とされている(『教育学術界』第43巻第3号, 1921年, 広告)。
- 12) 前掲真朗子, 203頁。
- 13) 「教育界秘話(十二)」『教育週報』第290号, 1930年, 3頁。
- 14) 前掲尼子「八大教育主張の講習会」98～99頁。
- 15) 前掲風塵子, 218～219頁。
- 16) 志垣寛「新教育三十年史(11)」『教育週報』第851号, 1941年, 4頁。当時、教育学者に対抗意識をもっていた実践家や実践研究者たちは、自らを「実践家」と称していた。
- 17) 前掲真朗子, 203頁。主催者側の準備に関する様子につい



- て、特に断りがない場合は本記事による。
- 18) 同上書, 204頁。
  - 19) 『教育学術界』第43巻第2号, 1921年, 261頁。ただし, この時点では講演順や講演内容は確定しておらず, 講演題目と演者は以下の順で広告されていた。「芸術教育の真髓 片山伸君, 自動教育の真髓 河野清丸君, 創造教育の真髓 稲毛金七君, 動的教育の真髓 及川平治君, 全我教育の真髓 千葉命吉君, 自由教育の真髓 手塚岸衛君, 聖愛教育の真髓 鯉坂國芳君, 自学教育の真髓 (外遊中) 樋口長市君」
  - 20) 『教育学術界』第43巻第3号, 広告。
  - 21) 『教育週報』は, 「見学や質疑を講習会に入れたのはこの時が初めだらう」と報じている(前掲「教育界秘話」)。
  - 22) 「後援」には, 以下の団体の名が挙がっている。帝国教育会, 茗溪会, 初等教育研究会, 児童教育研究会, 東京府教育会, 家事研究会, 教育研究会, 内外教育評論, 小学校, 教育時論, 教育界, 国語教育, 創造, 教育論叢, 教育問題研究, 明日の教育, 理科教育, 現代教育, 農業教育, 啓明, 日本学校衛生(『教育学術界』第43巻第3号, 広告)。大日本学術協会は, この研究大会の「宣伝ビラ」を全国の小学校中学校に発送しており, それにかかった費用は1200~1300円といわれている(前掲「教育界秘話」)。
  - 23) 『教育学術界』第43巻第4号, 1921年, 525頁。座席には, 男子1200人, 女子300人を先着順に収容することにしたという(前掲「教育界秘話」)。
  - 24) 前掲真朗子, 205頁。
  - 25) 同上書, 205~206頁。
  - 26) 同上書, 206頁。
  - 27) 後年, 小原國芳は, この時の様子を「集るもの恐らく四千名を超えたらう。大講堂ミッシリ。廊下もびっしり。窓も鈴なり。熱狂そのものだった。ホントに湧き立った」と述べている(小原國芳ほか『八大教育主張』玉川大学出版部, 1976年, 4頁)。
  - 28) 前掲真朗子, 206頁。
  - 29) 前掲尼子「八大教育主張の講習会」99頁。
  - 30) 『教育学術会』の会員募集広告では, 「開会中座長の任に当る」司会者として, 大瀬甚太郎, 春山作樹, 吉田熊次が予定されていた(『教育学術界』第43巻3号)。『教育研究』の誌上広告でも, この3人が司会の予定とされている(『教育研究』第224号, 東京高等師範学校初等教育研究会, 1921年, 74頁)。
  - 31) 会期中の様子については, 特に断りがない限り, 前掲風塵子「教育学術研究大会奇録」(209~219頁)によった。
  - 32) 同上書, 219頁。
  - 33) 同上書, 220~221頁。「教育研究同志会々則案」によれば, 同会は以下の事業を行うこととされている。
    - (一) 教育学術研究雑誌ノ頒布
    - (二) 教育学術研究大会ノ開催
    - (三) 教育学術講演会ノ開催
    - (四) 地方, 支部出張講演
    - (五) 教育学術ニ関スル図書ノ刊行
    - (六) 内外各地ノ教育状況視察見学
    - (七) 教育学術問題ニ関スル質疑応答
    - (八) 其他会員ノ希望, 輿論ニシテ本会ノ目的ニ副フ如キ諸種ノ事項
  - 34) 前掲真朗子, 207頁。ただし, 原文は漢数字。
  - 35) 各種教育雑誌の広告によれば, このころには, 宿泊を伴う夏期大学や温泉地での学会などが度々行われていた。その背景には, 1917(大正6)年に大戦景気が最高潮に達したことや, 大正時代に国鉄の路線がほぼ全国的な鉄道網を完成したことによる「観光」(=ツーリズム)の大衆化があったとみられる(澤壽次・瀬沼茂樹『旅行100年』日本交通公社, 1968年, 154~155頁)。
  - 36) 吉田熊次「八種の教育主張に就いて」『教育学術界』第44巻第1号, 4頁。
  - 37) 文左工門「漫画過去一年」『学校教育』第103号, 広島高等師範学校教育研究会, 1922年, 22頁。
  - 38) 藤原喜代蔵『明治大正昭和思想学説人物史』東亜政経社, 1943年, 472頁。
  - 39) 大瀬甚太郎「教育学術研究大会に就いて」『教育学術界』第44巻第1号, 3頁。
  - 40) 阿部重孝「教育学術研究大会列席感想」同上書所収, 13頁。
  - 41) 入澤宗寿「教育学術研究大会列席所感」同上書所収, 10頁。
  - 42) 春山作樹「研究大会列席其夜の印象」同上書所収, 5頁。
  - 43) 小林澄兄「教育学術研究大会に就いて」同上書所収, 8頁。
  - 44) 笹原英三郎「時は進む」同上書所収, 171頁。
  - 45) 高坂仲重郎「革命的講習会感想」同上書所収, 175頁。
  - 46) 松井藤市「教育学術研究会に列して」同上書所収, 187頁。
  - 47) 田淵巖「我国講習会制度に於ける Epoch-making event」同上書所収, 126頁。
  - 48) 夏期講習会の起源と定着過程については, 佐竹道盛「教員夏期講習の起源に関する一考察」(『北海道教育大学紀要』第1部C, 第32巻第2号, 1982年, 1~13頁)に詳しい。
  - 49) 『官報』第2319号, 大蔵省印刷局, 1920年, 20~21頁。
  - 50) 『学制百年史』資料編, 文部省, 1972年, 218~219頁, 222~223頁。

- 51) 佐藤幹男『近代日本教員現職研修史研究』風間書房, 1999年, 323～332頁。
- 52) 夏期講習会の「官製化」については, 前掲佐竹論文(10～12頁)のほか, 佐竹道盛「大正期における教員現職教育の諸問題」(『北海道教育大学紀要』第1部C, 第31巻第2号, 1981年, 11～25頁)を参照した。
- 53) 前掲真朗子, 202頁。
- 54) 『帝国教育』第467号, 帝国教育会, 1921年, 広告。
- 55) 前掲佐藤書, 306頁。
- 56) 同上書, 209頁。
- 57) 西山哲治『小学校改善の実際的研究』開発社, 1919年, 242～246頁。
- 58) 三浦藤作「教育会改造私見」『帝国教育』第455号, 1920年, 94～98頁。
- 59) 佐藤浩悠「現在の教育会を打破革新せよ」『教育学术界』第43巻第3号, 331～333頁。
- 60) 同上書, 333頁。
- 61) 前掲風塵子, 218頁。
- 62) 前掲笹原, 172～173頁。
- 63) 大塚常太郎「教育学研究大会所感」『教育学术界』第44巻第1号, 152頁。
- 64) 湯原元一「教育学研究大会に序す」『教育学术界』第43巻第4号, 616頁。

# 八大教育主張講演会の教育史的意義

## The Pedagogical Significance of the Lecture Meeting of *Hachidai-Kyoiku-Shucho (The Eight Greatest Pedagogical Opinions)*

橋本美保\*

Miho HASHIMOTO

学校教育学分野

### Abstract

The Lecture Meeting of *Hachidai-Kyoiku-Shucho (The Eight Greatest Pedagogical Opinions)* is known as a historical event that had been a symbol of *Taisho New Education*. However, there are not so many researches upon this event. Its main feature is not even clear enough. In this article, I will identify such facts about this lecture meeting as the purpose and the sequence of its implementation, the circumstances and the evaluation of its operation and the background of its success.

As a conclusion, I could clarify three points as follows. First, the organizers had planned this meeting as a “pedagogical society” where participants could exchange questions and views at will. They held the meeting in the same summer period to counter the existing summer training institutes.

Secondly, the lecture meeting was based upon the new strategy of promoting practical studies of pedagogy that are rooted in the reality of education in Japan, not like the main stream educational researches of those days that would bring Western pedagogy and introduce them to the Japanese.

Thirdly, the participants were coming with great anticipation, because they had been dissatisfied with the existing training institutes, and were satisfied to a considerable extent.

Thus, I had suggested that the pedagogical significance of this Lecture Meeting should be reconsidered from the modern viewpoint of teacher training.

**Keywords:** Hachidai-Kyoiku-Shucho, Taisho New Education, Todomu AMAKO, teacher training

*Department of School Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

---

\* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

**要旨：** 八大教育主張講演会は、「大正新教育運動」を象徴する歴史的出来事として有名な大講演会である。ところが、八大教育主張に関する研究は少なく、講演会そのものの実態についても明らかでない。本論文では、この講演会が開催された目的や経緯、運営の実態や評価、盛会の背景などを明らかにし、教育史上におけるその位置づけを考察した。

その結果、以下のことが明らかとなった。第一に、主催者は、参加者が自由に質問や意見を述べて討論できる「研究会」としてこの会を企画し、既存の夏期講習会に対抗して同時期に開催した。第二に、この講演会は、欧米の教育学説を調査して紹介するという当時の教育学研究に対して、日本の教育現実に基づく実践的研究の新興を目的として行われた。第三に、参加者は、既存の講習会に対する不満からこの講演会に期待し、一定の満足感を得ていた。以上のことから、八大教育主張講演会の教育史的意義については、現職教員研修の視点からさらに検討する必要があることを示唆した。

**キーワード：** 八大教育主張，大正新教育，尼子止，現職教員研修